

## 「李陵」 (中島敦)

漢の武帝の時代、漢帝國は騎馬民族匈奴の侵入に悩まされた。天漢二年、武帝は李陵に輜重ちようじゆう隊を率ゐて匈奴攻撃に加はる様命じらる。名將の孫であり、騎射の名手でもある李陵は兵を熱心に鍛錬してゐたから、輸送任務の輜重では情無く、戰鬪部隊として行かせて欲しいと嘆願する。が、漢軍には騎馬の餘力が無く、李陵の歩兵では騎兵隊と戦ふのは覺束ない。しかし輜重に回される位なら「己の爲に身命を惜しまぬ部下五千と共に危きを冒」したいと訴へる李陵に武帝は喜び、李陵軍は戰鬪部隊として北方の邊地に進發する事になる。

處が、邊地の老將が若き李陵の下風に立つのを嫌ひ、攻撃を春迄遅らせたいと密かに武帝に奏上した。武帝は激怒する。李陵が急に怖氣づいたと取つたのだ。無論、李陵の與あつかり知らぬ事だつたが、激し易い武帝の命によつて李陵は「騎兵を伴はぬ北征」を敢行せざるを得なくなり、厳しい氣候の中、數千里の行程を進み、十萬以上の敵軍に立向ふ。李陵軍は善く戦ひ何度

か猛攻を退けるが、終に力盡きて最後の包圍突破を試み、混戦の中、李陵は敵に生け捕られて了ふ。

敗報に接した武帝が李陵の處置を重臣に諮ると、武帝の怒りを恐れ李陵を罵る者ばかりが、太史令・司馬遷のみは李陵の「善戰」を辯護して、「上の聰明を蔽はう」とする「君側の佞人ねいじんばら」を痛烈に非難した。その揚句、司馬遷は職を追はれ、「男を男でなくする奇怪な刑罰」、宮刑きゆうけいに處せられる。「刑罰も數ある中で、よりによつて最も醜惡な宮刑にあはうとは！」狂亂する司馬遷は「生きることの歡びを失ひ」盡すが、史家たる己が使命の遂行に辛うじて歡びを覺えつつ、八年後、「史記」百三十卷を完成する。

一方、李陵は匈奴の王によつて武勇を讚へられ厚遇されるが、漢人たる自覺を失ひはしない。だが、匈奴に降り匈奴兵を鍛へた別の李將軍と誤認され、武帝の怒りを買ひ、老母妻子弟を殺される。李陵は武帝を憎み、漢を見限るが、死んだ部下を思ひ匈奴軍に加はらうとはしない。そんな折、やはり匈奴に囚はれ嚴寒の地で鼠を食ひ漢人の意地を守り瘦我慢を續ける蘇武に會ふ。「運命と意地の張合ひをしてゐる」乞食の如き彼の姿に李陵は壓倒される。蘇武は「やむを得ぬ」事情があつても自らに「やむを得ぬのだ」といふ考へ方を許さうとせず、人知

れず死なうとしてゐるのだ。やがて武帝が死に和平の氣運が高まり、李陵は捕虜交換で歸還を勧められるが、首を縦に振る事が出来ない。蘇武は生存が知られて歸國する事になる。李陵は「天はやはり見てゐたのだ」との感に打たれる。

中島敦を魅了したのは「世界のきびしい惡意」（「牛人」）に翻弄される人間の姿であつた。李陵も司馬遷も蘇武もそれに三者三様に立向ふが、無論、題名が示す通り、李陵こそは作者が最も描きたかつた人物である。「李陵にとつて蘇武の存在は崇高な訓戒でもあり、いらだたしい惡夢でもあつた」と中島は書いてゐるが、如何に「やむを得ぬ」事情があつても、人たる者は「やむを得ぬのだ」といふ考へ方を自らに絶対に許してはいけないのか。しかし蘇武の純粹な生き方は實に美しく、それに比して悩み惑ふこの己れの有様はどうか。さういふ倫理的葛藤の眞摯、自己呵責の凄絶は中島文學の大きな魅力であり、その根柢には彼の「ありうべからざるほど暗い」（武田泰淳）人間觀が存してゐるのだが、最早それを説明する紙幅が無い。とまれ、自己と世界とを假借なく見据ゑる厳しい眼差、それに相應しい理知的で緻密で雄勁な文章等々、微溫的で情緒的な吾國の文化風土に於て、中島敦の文學は眞に得難い。